すぎな

青森県立つくしが丘病院
第141号

『副院長に就任して』

副院長
栗林理人

この度、平成二十三年八月一日に青森県立つくしが丘病院副院長を拝命し、就任いたしました。

平成二十一年四月一日に弘前大学医学部附属病院より、当院へ診療部長として赴任後、二年間にわたり診療部長として働かせていただきました。堀内院長、当時の藤田副院長の動きを見ながら、少しでも院内の業務が円滑に動くようにと同僚の先生たちの知恵と力をかりて、自分なりに精進してきました。

実は、この四月より青森県立中央病院メンタルヘルス科の齋藤部長の退職に伴い、急遽、リリーフ投手のように四月から七月まではメンタルヘルス科部長として勤務する経験を持つことができました。青森県立中央病院に一人の医師として勤務する中で、あらためてその大きさに驚かされ、同時に自分の無力さを感じさせられました。しかしながら、外来診療、院内のリエゾン、緩和医療に携わる中で、徐々に他科の先生方とも面識ができ、連携の基盤のようなものができあがったように思えました。とくに六月からのドクターヘリ導入と救命センターの稼動に伴い、メンタルヘルス科へのコンサルトが多くなり、臨床現場においてのチームプレーが展開したからです。

今後、当院では青森県立中央病院の経験をもとに青森県立中央病院との連携、協力という、広い視野にたって、県立病院に求められている機能を果たせるように努力したいと考えています。宜しくお願いいたします。

医局紹介

総括主幹　坂本　奈緒

医局は、常勤医師として八名の医師（うち精神保健指定医七名）が所属しています。その他、青森県立中央病院兼務の医師が二名、青森県精神保健福祉センター併任の医師が二名、嘱託の歯科医師一名が所属しています。また、臨床研修関連病院として、青森県立中央病院や青森市民病院等から研修医を受け入れています（平成二十三年度は合計十四名）。

医局では、当院の病棟診療や外来診療のほか、地域の精神医療・福祉の充実のために関係機関との連携も積極的に行っています。地域の福祉施設や中央・むつ児童相談所への診療支援、学校教育センターや青森市就学指導委員会、青森市介護認定審査会などへの協力も行っています。また、青森県精神科救急システム青森ブロックに属し、浅虫温泉病院、芙蓉会病院、生協さくら病院とともに夜間・休日に緊急で精神科医療を要する患者さんの診療にあたっています。

今後も医師一人一人の専門性を高め、さらには県立つくしが丘病院医局としての力を増し、地域の精神医療・福祉の充実に貢献することができるよう邁進していきたいと思います。

院長　堀内　雅之
副院長・診療部長兼務　栗林　理人

【急性期・救急診療科】
部長兼務　栗林　理人
副部長　鈴木　克治
副部長　桐生　一宏
兼務　柿崎　陽平

【児童・青年期診療科】
部長兼務　栗林　理人
兼務　林本　章
総括主幹　坂本　奈緒
医師　吉田　恵心

【外来・社会復帰診療科】
部長　増谷　美砂
併任（精神保健福祉センター本務）
岩佐　博人
併任（精神保健福祉センター本務）
武田　哲
医師　敦賀　光嗣

林本部長

柿崎医師

坂本総括主幹
吉田医師
桐生副部長
堀内院長
敦賀医師
栗林副院長
研修医
増谷部長
鈴木副部長

病気のミニ知識 ㊵

「双極性障害について」

急性期・救急診療科
副部長　鈴木　克治

うつ病や躁病、加えて躁とうつを繰り返す病態の総称として「躁うつ病」という言葉が使われていたのに対し、「双極性障害」は、その名の通り、躁とうつを繰り返す病態のみを指し示している。

双極性障害の有病率は報告によってまちまちである。同じ診断基準に基づいた最新の国際調査でも生涯有病率はアメリカで二・一％、ブラジル一・一％に対して日本は〇・二％となっており、これが人種差によるのか、各国の診断技術の違いによるのかは判然としない。同じ診断基準に基づいた調査とは言っても、「元気がない」とか「疲れやすい」などの評価を面接で行うわけなので、言語や文化が変われば相当の違いが生じることは容易に想像できる。

「うつ」は思考、感情、行動がいずれも抑制され、エネルギーの欠乏のために生産性が低下し、軽症であっても不調感として自覚しやすいのに対して、「躁」はエネルギーに溢れ、多弁、多動、浪費や逸脱行為に至るような場合にはわかりやすいが、軽症の場合にはむしろ生産性や適応力は向上し、本人も気分が良い場合があるので自覚しにくく見逃されやすい。躁病の基準を緩くしてちょっとでも症状があれば診断をつけるようにした場合、前述の生涯有病率はアメリカ四・四％、ブラジル二・一％、日本〇・七％と上昇するようだ。厳格な基準で診断した場合に比べ日本も増えてはいるのだが一％に満たず、まだまだ日本では双極性障害は稀な病態という認識である。

日本では自殺対策として、うつ病の早期発見への取り組みがなされてきているが、双極性障害の方がうつ病よりも自殺企図率がおよそ二倍高く、うつ病と診断されていても、長期経過の中で双極性障害であることが判明するケースも少なくないことから、自殺対策としては、双極性障害の早期発見に力を入れるべきかもしれない。アメリカやブラジルの方が、日本よりも陽気さが似合うし、自由でハチャメチャなことをしている姿もイメージしやすい。では日本人にイメージできそうな躁症状とはなんだろう？例えば勤勉さ。自分の人生設計に対して無頓着で会社や組織にその身を捧げ、見通しのない将来へ向かって無益とも思われる努力をし続ける性質は、実は躁的な要素を含んでいるのではないだろうか。ただ上機嫌で行動にまとまりを欠くものばかりが躁病ではないだろう。視点を変えれば、日本人の双極性障害の有病率も実はもっと高いのではないかと思う今日この頃である。

ニューフェイス紹介

『よろしくお願いします』

急性期・救急診療科
副部長　桐生　一宏

お世話になります。八月より勤務させていただいております。新潟生まれの新潟育ちですが、大学は弘前大学で青森県に来てからの方が長くなりました。津軽弁もヒアリングができるようになっただけでなく、自然に話すようになりました。

つくしが丘病院で勤務するのは、今回で三回目になります。自身の精神科医としてのスタートとなった場所でもあり、病棟や外来で知っている患者さんやスタッフの方々の顔をみるとほっと安心します。そして新しくなり大きく変わった病院の新鮮さに気持ちが洗われるような気もします。

一緒に働かせていただく先生・スタッフの方々は、みな仕事熱心かつ知識・経験ともに豊富であり大変に勉強になり、またよい刺激になります。

私自身、初心に戻り一から出直す心づもりで頑張りたいと思います。

何かとご迷惑をお掛けすることもあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

なるほど！データ その2

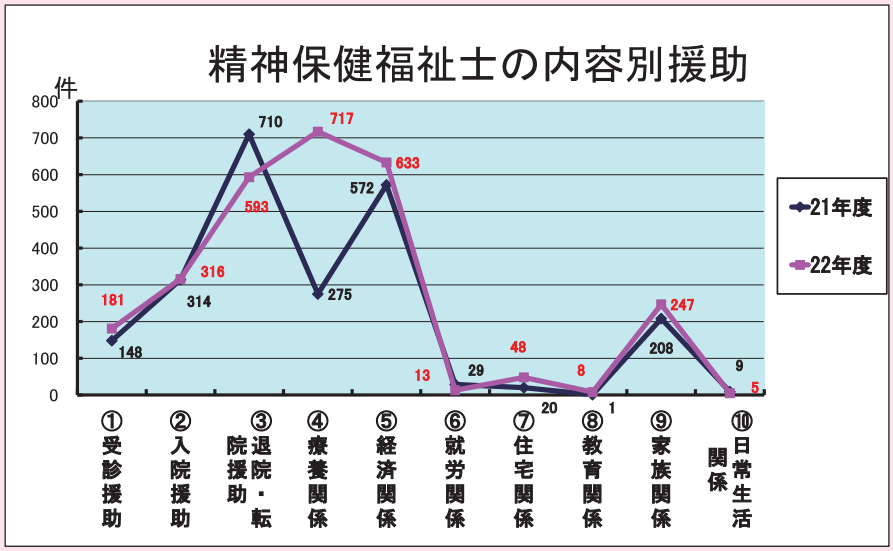
前号より、当院で得られたアンケートや調査データの統計・解析結果を、皆様にお知らせしております。

第二回目も前回に続き、医療連携室より『精神保健福祉士（PSW）』の業務を支援内容のデータを使ってご紹介します。

精神保健福祉士は、精神医療の現場、保健所及び福祉分野等で相談支援を行う専門職です。相談者の意見を尊重し、生活上の問題を解決するための援助や精神障害者の社会参加に向けた活動を援助しています。

現在、常勤の精神保健福祉士二名で、相談に対応しています。

グラフは、平成二十一年度と二十二年度の援助を、内容別に比較したものです。『④療養関係』の二十二年度件数が前年度の約二・五倍増となっています。その内訳は、障害者手帳の申請、認定障害区分などの自立支援法の制度利用、施設入所の説明などです。



つくし つめこみニュース

外来担当医表（平成二十三年八月一日現在）

区分＼曜日	月	火	水	木	金
新患	吉田	増谷	栗林	敦賀	坂本
	敦賀	鈴木	桐生	鈴木	桐生
再来	堀内	武田	岩佐	栗林	鈴木
			敦賀		
	坂本	桐生	増谷	増谷	吉田
電話対応（午前）	坂本	桐生	敦賀	増谷	吉田
児童予約外来（午後）		栗林 坂本 吉田			

＊外来担当医表が変わりました。

九月二十六日、午後一時より『エレベーター事故対応講習会』が行われました。

事故時の対応として、関連先への連絡や扉を開ける方法、脱出時の注意事項を学びました。

また、午後三時より『消火散水栓』と『消火器』の操作、放水・放射の訓練を行いました。

消火器放射訓練

消火栓による放水訓練

エレベーター事故対応講習会の様子

青森県立つくしが丘病院　〒038−0031 青森市三内字沢部353−92　TEL 017−787−2121　発行者:すぎな編集部
FAX 017−788−5086　印　刷:ワタナベサービス㈱